島井佐枝
KG＋ディレクター／MUZ代表
荻野NAO之
アーティスト／スタンフォード大学レクチャラー／立命館大学非常勤講師

KG＋『鴨川胎動-空川境界展-』 川鵜被害対策コラボレーション
これまでの開催概要と今後の開催予定について

鴨川胎動　2019年実施風景から(当資料のドローン撮影は、全て京都府土木課及び大阪航空局からの許可を得ている)

0. KYOTOGRAPHIE及びKG＋について：

京都国際写真祭KYOTOGRAPHIE及びアートフェスティバルKG+は、京都で同時にはじまった日本でも数少ない国際的なフェスティバルで、世界屈指の文化都市・京都を舞台に開催されている。ともに、以下の体制で運営されている。

共催：京都市、京都市教育委員会

後援：京都府、京都商工会議所、京都ブランド推進連絡協議会

来年で開催８年目を迎えるこれらのフェスティバルは、多くの写真関係者やアート関係者、観客そして市民が集い、アートを介した様々な交流を通じ、芸術や建築、歴史文化などの関連分野にも造詣を深めていただけるよう取り組まれている。

1. 『鴨川胎動-空川境界展-』川鵜被害対策コラボレーション実施概要：

・実施の発案

平成9年の河川法改正により、初めて河川管理の目的に「生態系の保全」が位置付けられたことにより、徐々にその影響が鴨川でも天然鮎の遡上という形であらわれている。しかし京都府民をはじめ多くの一般の人々にはまだなかなか知られていない。

鴨川にとっての胎児ともいえる天然鮎遡上の復活を見守り、より多くの天然鮎の遡上を祈り、この変化を多くの京都府民をはじめ世界中の人々に知ってもらうため、賀茂川漁業協同組合が毎年実施している川鵜被害対策とのコラボレーションにより、昨年より2年連続でKG＋『鴨川胎動-空川境界展-』を実施している。

・実施にまつわる許可

実施にあたっては、

京都府京都土木事務所からの「河川法第24,26条の許可」

京都市風致保全課からの承認

を受けた上で、KG＋の共催である京都市文化市民局や京都市教育委員会、そのほか京都市産業観光局、京都府内水面漁業協同組合連合会など、多くの方々のお力添えをいただき、改善を加えながら実施。

・実施の際のコラボレーション

環境省・農林水産省が強化している全国的なカワウ被害対策の一環で、賀茂川漁業協同組合が実施している川鵜被害対策防鳥ロープ設置。その一部範囲でコラボレーションを実施。今回は現在進行中の水生生物保全に関する啓発でもあることから、展示シートの展開は、参照した過去の友禅流しや他の鴨川文化イベントにみられたような水中での展開は避け、あくまで防鳥ロープの上、水面の上で展開。展示シートが案山子的に川鵜被害対策強化になると共に、昨今京都の建設現場でも見られるようになった仮囲いアートに通ずるものとして、景観配慮にも大きな関心を持って実施準備し、京都市風致保全課の承認も得て実施。従来から実施されてきている川鵜被害対策の殺風景な防鳥ロープの上に設置することで、景観をより豊かにしている。

↑展示図案の片側の龍

・実施で使用した図案と意図、意義

今は失われてしまった京文化の一つ、友禅流しも想起しつつ、過去の鴨川での文化的な展示も参照しつつ、鮎や鴨川の水面、鳥や雲、堰堤や釣り人の写真をもとに二匹の川を登る双龍をイメージしてモンタージュシートを制作し、東西にそれぞれ展開。モンタージュ要素を川の周辺の写真を中心とすることで、景観との親和性を生む手法を取り入れている。登竜門の故事や、この時期の端午の節句の鯉のぼりも連想され、伝統文化とコンセプト的にも親和し、天然鮎のより多くの遡上を祈る図案である。KG＋の一つということで、京都府民をは

じめより広く一般の方々への訴求が可能になり、鴨川に起きている変化への関心醸成を担う。

京都府鴨川条例前文では鴨川の文化的意義について、歴史の中で人々の集いや遊興の場、芸能発祥の舞台となって、様々な伝統的な水文化をはぐくんできたとうたわれているが、まさにこの鴨川と呼応しつつ、昨今の人々の環境意識への高まりにも呼応した実施であると考えている。当開催を通じて接点のあった人々に、生活の横に存在している自然と自分たちとの関係により一層意識を向けてもらうきっかけとなり、現在国土交通省、環境省、農林水産省、京都府、京都市、漁業協同組合などが連携して環境課題に向き合っている状態に目を向けてもらえる契機となることを目指している。また、京都府が策定した京都府生物多様性地域戦略の中言及されている森里川海のつながり回復に関連した展開も今後組込んでいければと考えている。

・**参照事例**

京都の事例：鴨川水面内の世界水フォーラム案内巨大シート　鴨川内での友禅職人による友禅流し納涼イベント
(水フォーラム新聞、2003年3月16日紙面より)　(日本経済新聞、2014年8月19日の記事より)

南座工事現場での仮囲いアート(産経新聞、2018年9月14日記事より)

海外の事例：オランダのBreda Photo(IMA onlineサイトより)　スイスのImages Vevey (IMA onlineサイトより)

2. これまでの実施時期

2018年：　4月11日～5月26日

2019年：　5月11日～5月25日

3. 実施場所と素材

団栗橋と四条大橋の間

- 川鵜被害対策の実施されているエリアはより広範囲の、京都市左京区静市(洛北発電所)～下京区斎藤町(団栗橋下流)で、その南の一部に当たる場所
- 川鵜対策の防鳥ロープゾーンの中におさまった、東西両護岸付近
- 防鳥ロープエリアの中で、一般市民や釣り人の邪魔にならない箇所を選定
- シート出力に使用するインクは環境を考慮し、日本環境エコマーク事務局によりエコマーク認定を取得しているものを使用
- 風除けも考慮し、シートには高速道路工事期間告知垂幕などで使用されているメッシュターポリンを使用
- メッシュターポリンは視覚的にもシート自身の存在感が和らげられ、景観と親和的

2018年実施風景から

2019年実施風景から

(※2019年は、2018年から実施場所と固定方法に改善を行い、少し実施場所とシートの並びが変化している)

4. メディア取材

防鳥ロープに"竜"胎動

北区のアーティスト荻野さん 写真展示

鴨川 アートや学びで美しく

京都新聞朝刊の記事(2018年5月17日)、

RADIO MiX KYOTOの生出演(2019年5月13日)

5. 海外からの視点

・**アルメニア共和国エレバン第１回国際写真フェスティバルからの反応**

facebookなどを通じ、鴨川での展示形態と、鴨川の変化に大きな興味を持ったアルメニア共和国の第１回国際写真フェスティバル(2019年8月24日～9月28日(現地滞在は8月30日まで))から招聘を受けた。展示と共にMasterclassを担当し、鴨川展示に関わる講演を実施。大変大きな関心が寄せられる。アルメニアの首都エレバンにもハラズダンという川が流れており、自分達も川へもっと意識を向けるきっかけにしたいとのことで、鴨川のでの実施事例としてお話をした。鴨川での展示は、景観へ配慮した景観融合型の展示手法として多大な関心が寄せられ、今回のフェスティバルでも参考事例とされた。

アルメニアフェスティバルのホームページから

・**このほかの国々**

この他いくつかの国々のフェスティバルやメディアからも(まだ明記はできないが)鴨川事例紹介の相談などが寄せられており、来年以降の鴨川での実施可能性と鑑みつつ、そのプロセスなども含め情報共紹介していきたいと思っている。

・**そのほか寄せられた声**

Each spring during the last two years, I have made several special visits to Kyoto traveling from Kobe. The motive for these Spring visits is always the same. I go first to join the members of the Kamogawa Fishermen's Association and Naoyuki Ogino for the installation of his photographic works along the river.

Later visits took me to Kyotographie and KG+. However those days, always end at the river next to Ogino's installation, thinking about the river and the lives it supports.

So why give so much time (and expense) to this small meditation? This installation is by world standards not large in scale, but by any other measure it is very large. First, during it's construction,

it captures the imagination of people passing. They stop and wonder, surprised to see so diverse a group working together building something so mysterious and even magical.

During a recent construction there were participants from Kyoto, Switzerland, America, and elsewhere. Such an action puts on display the global character of Kyoto. And when placed in the context of KG+, of which it is a part, the installation contributes to enhancing Kyoto's importance as a world cultural centre.

Next, this work with it's repeated support from the Fishermen's Association, the Kyoto City government and the Prefecture gives us a reason to understand that many people are thinking carefully about the river, its fish and wildlife population as well as the life of the city. The work and its presence on the river are in fact a call to all of us, a reminder, that without the river this city would be a very different place.

Naoyuki Ogino's installation on the Kamo gawa, Is far from a personal indulgence. It is an important cultural, social and educational contribution to our region. Last year as an outcome of the installation, members of the Fisherman's Association we invited Canadian Academy, a leading educational institution in the region, to talk with high school students about the the the life of the river. And each year Canadian Academy sends scores of students to visit Kyotographie, KG+ and it related installations.

In the final analysis, Naoyuki Ogino's installation draws upon no public funds, utilizes a minimum of public space and yet contributes a great deal to our understanding of Kyoto as a vital city, deep in culture, social life, education and a profound engagement with the environment.

This engagement places Kyoto among the cities leading the way into the future toward a more balanced and sustainable world.

It's my honest belief that we can't do any better with our public resources.

Sincerely,

Paul Venet

（以下、簡易的な日本語訳）

過去2年間の春に私は神戸から京都に何回か特別な訪問をしています。毎春のこれらの訪問の動機はいつも同じです。まずは、賀茂川漁業協同組合と荻野NAO之の川沿いでの写真作品のインスタレーションに立ち会うために。

そしてその後数回は、Kyotographieに出かけるために。しかしいつも最後は、鴨川の辺りの荻野のインスタレーションの横に舞い戻ってきて、川とここで守られている生き物たちについて考えながら終える形でした。

それでは、なんでこの小さな瞑想に多くの時間（や費用）を私は費やしているのでしょう？このインスタレーションは、言ってみれば世界標準からしたらさして大きいわけでもなくスタンダードなものですが、しかし別の尺度に立って見てみると非常に大きなものです。まず、設営時の段階から、通り過ぎる人々の想像力を駆り立て

ています。彼らは立ち止まってこの何かミステリアスでマジカルなものを、とても多様な人々のグループが一緒になって協力して設営している様子を目の当たりにして驚きます。

直近の設営時は、京都、スイス、アメリカをはじめ色々なところからの人々が集まって手伝っていました。これは、京都の国際性豊かな姿を映し出してもいます。そしてこれがKG+の文脈に置かれた時（実際にKG+の一つなのですが）、このインスタレーションは、世界の文化の中心地としての京都の重要性を高めることに貢献することになります。

次に、この展示に向けられた漁業協同組合や京都市、京都府からの継続的なサポートのもとで展開されているということが、いかに多くの人々が川や、魚、生物の存在について、都市の人々について考えるのと同じように気を使っているかというその様子を理解するきっかけになっています。この作品とその川での展開は実に、我々に対する呼びかけになっていて、ここにもし川がなかったらこの都市の様相は全く違うものになってしまうということを思い出させてくれるものになっています。

荻野NAO之の鴨川でのインスタレーションは、個人的な活動を超えています。これは我々の地域に対するとても大切な文化的貢献であり、社会的貢献であり、教育的な貢献になっています。

昨年、このインスタレーションの派生として、神戸の先進的な教育機関であるカナディアンアカデミーに賀茂川漁業協同組合の方をお招きして、川の中の生命についてのお話を高校生にしていただきました。そしてカナディアンアカデミーは、毎年KyotographieとKG+の見学に数十人の学生を送り出し、展示やインスタレーションを見学しています。

最後に、荻野NAO之のインスタレーションは公的資金を一切使用せず、最小限の公的スペースのみを使用して、京都の文化、社会生活、教育、そして自然との深い関わりを持っているその活気ある都市としての姿を我々が理解するのに大きな貢献をしています。

この取り組みによって京都は、よりバランスのとれた持続可能な世界という未来への道筋をリードする都市のひとつとして見ることができるようになります。

私たちの公共資源を通じて、これ以上にうまくやることはできないと私は心から感じています。

敬具

ポール・ベネット

6. 2020年の予定

当京都府民会議への報告と、ここでいただいたご議論やご意見をもとに、さらに展示方法などの改善をほどこし、以下のスケジュールで実施を予定している。現状で改善を予定している箇所は、シートの留め方で、従来のビニール紐からアウトドア向けの丈夫なゴム製の紐に切り替えることでより耐久性を確保する予定である。図案に関しても刷新し、天然鮎の遡上を見守りつつ、更に人々に訴求していけるものを予定している。あいちトリエンナーレでの騒動に接し、府民と積極的に対話をしつつ進めていきたいと感じたところだったため、今回改めて鴨川府民会議のような場をお借りして説明の機会をいただき、大変にありがたく感じている。

・**開催時期(予定)**

2020年4月9日～鮎釣の解禁日前日

・**実施場所と素材(予定)**

場所：過去2年と同様、団栗橋と四条大橋の間の範囲内の川鵜被害対策エリアを予定

素材：過去2年使用してきたものは傷みが激しいため、同素材で新たに新調する予定

7.これまでの実施風景

・**2018年実施風景より**

・**2019年実施風景より**

「KG+2019」に係る鴨川河川敷での作品展示状況（令和元年5月16日時点） 1/2

資料１－２

「KG+2019」に係る鴨川河川敷での作品展示状況（令和元年5月16日時点） 2/2